

Title	西漸運動と東部農村：ニュー・ヨーク州の場合
Sub Title	The westward movement and New York farmers
Author	岡田, 泰男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1980
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.73, No.3 (1980. 6) ,p.345(25)- 362(42)
JaLC DOI	10.14991/001.19800601-0025
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19800601-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19800601-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 西漸運動と東部農村

— ニュー・ヨーク州の場合 —

岡田 泰 男

問 「西部へ移住すれば暮らし向きは良くなりますか。私は生まれつきの農民で、年は43歳、妻も同い年です。18と20の男の子と、14と16の女の子があり、その下に9と11の男の子、ふたつといつづの女の子がいますが、家族がバラバラにならないような所に移住したいと思います。2頭の良い馬と、良い農具、酪農用具、家畜をいくらか持っていますが、お金はごくわずかしか持っていません。」

答 「はい、良くなります。あなたはまさに最良の西部移住者になれる資格をそなえています。お金などなくともかまいません。土地は安く借りられますし、すぐに、借りるのではなく貸せるような身分になるでしょう。ぜひいらっしゃい。あなたや、あなたのような方々、とりわけ、男の子も女の子も、生まれつきの農民の息子、娘であるような場合には。」

〔オルバニー『カルティヴェイター』誌、1843年2月号より〕

## は し が き

この論文の目的は、アメリカ西漸運動を、東部農村の側から見ることである。西漸運動についての研究の多くは、西部における開拓の進展や農業の発展など、主に移住者を受け入れた地域についての考察であって、送り出した側については、あまりふれられていない。概説書において、東部農村は単に西部移住者の供給源として扱われ、移住の主たる原因は東部農業が西部との競争に敗北したためとされている。たとえばピリントンは「西部からの安価な農産物による破滅的競争」についてふれ、「西部の処女地からの穀物の洪水は、その価格をあまりに急激に引き下げたので、何千ものニュー・イングランド農民は戦いをあきらめ、彼等自身も西部へ移住した」という。また、ニュー・ヨーク州やペンシルヴァニア州においても類似の事態が見られ、「これらの地域からの余剰労働力は、五大湖周辺諸州に流入し、そこでより多くの穀物を生産し、より多くを東部へ送り、価格をさらに低下させ、他の者が彼等のあとを追う」結果を招いたことが述べられている。<sup>(1)</sup>

注(1) Ray Allen Billington, *Westward Expansion: A History of the American Frontier*, 4th ed. (New York, 1974), pp. 290-291.

一方、最近の概説書としては出色のものといえるローバウの書物には、「アパラチアを越えた西部の豊かな土地へ向けて、人々は、石ころだらけのニュー・イングランドの山地や、小作料の高いニュー・ヨーク州を後にした。……移住者の多くは若く、中には新婚の者もいて、彼等の最初の機会を試そうとしていた。すでに(東部で)農業をしていた他の人々は、新たに出直すことを望んでいた。皆が、なにか新しいものを求めていた。彼等の希望は、土地が、容易に、安く、あるいは只で入手できる遠く離れたフロンティアへ、人々を連れていった」とある。<sup>(2)</sup>したがって、西部はその豊かな生産力で東部の農民を追い立てると同時に、その安価な土地で彼等を引きつけたとすることができる。いわば東部は二重の意味での敗者であり、その結果が西漸運動の進展であったといいかえてもよからう。

こうした見方は、単に今日の概説書にのみ見られるものではなく、19世紀当時の、東部の新聞・雑誌や、農業協会の出版物においても、ほぼ一般的な見解であった。<sup>(3)</sup>東部諸州の政治家や農業雑誌の編集者は人口流出を憂え、それを食い止めようとしたが、その努力は空しかった。<sup>(4)</sup>しかも、東部の新聞・雑誌には、人々の西部移住熱を鎮静させるよりは、あおりたてるような記事も多かった。これは「若者よ、西へ」と叫んだホレイス・グリーレイ(Horace Greeley)の『ニュー・ヨーク・トリビュン』紙のみのことではなかった。たとえば、ニュー・ヨーク州オルバニーで発行されていた当時一流の農業雑誌『カルティヴェイター』は、西部移住に関する論説をしばしば掲載した。それはソロン・ロビンソン(Solon Robinson)の筆になるもので、移住にともなう困難も指摘されてはいたが、むしろ移住を促進する効果をもったように思われる。<sup>(5)</sup>

本稿では、19世紀ニュー・ヨーク州の場合をとりあげ、移住者を送り出す側の立場から、西漸運動を眺めてみたい。ニュー・ヨーク州は世紀の前半から中葉にかけて、合衆国の主要農業州であった。とくに前半においては小麦生産も盛んであったが、エリー運河開通後、西部との競争や、土地疲弊、病虫害などで主穀生産はおとろえ、酪農や畜産に重点が移った。それと同時に西部への移住も盛んで、世紀の後半には農家数、農場面積の減少も生じ、そこそこに放棄された農場が見られるにいたった。<sup>(6)</sup>したがって表面的には、概説書などで述べられた事態を示す好個の例のように見える。しかし、少し調べてみると、西部移住者の増大、西部農業との競争の陰に、別の事態が進行してい

注(2) Malcolm J. Rohrbough, *The Trans-Appalachian Frontier: People, Societies, and Institutions, 1775-1850* (New York, 1978), p. 164.

(3) たとえば New York State Agricultural Society, *Transactions* (1855), pp. 105-110.

(4) Donald B. Marti, "In Praise of Farming, 1815-1840," *New York History*, LI (1970), 351-375.

(5) たとえば *Cultivator*, X (1843), 37-38. これらは Herbert Anthony Kellar, ed., *Solon Robinson: Pioneer and Agriculturalist, Selected Writings* (Indianapolis, 1936)に収められている。

(6) Russell H. Anderson, "New York Agriculture Meets the West, 1830-1850," *Wisconsin Magazine of History*, XVI (1932), 163-198, 285-296; Paul W. Gates, "Agricultural Change in New York State, 1850-1890," *New York History*, L (1969), 115-141. なお一般的には Ulysses Prentiss Hedrick, *A History of Agriculture in the State of New York* (Albany, 1933).

## 西漸運動と東部農村

たことが明らかになってきた。そして、東部農村を単に西部開拓民の供給源ととらえ、東部農業の変化あるいは衰退を西部との競争の結果とする見方が、必ずしも正しくないことがわかってきた。以下において、こうした点を示すつもりである。

### I ニュー・ヨーク州からの人口流出

西漸運動は大規模な人口移動に他ならないので、その状況を知るためには連邦の人口センサスが、良い資料となる。とくに、1850年センサスからは、出生地(州)に関する統計が集められるようになったので、国内の人口移動について調べる際に便利である。<sup>(7)</sup>たとえば、1850年のニュー・ヨーク州の人口は約310万であるが、そのうち州内で生まれた者は約215万で、残りは、他州か外国生まれであることがわかる。また、他の諸州に住んでいるニュー・ヨーク生まれの者を合計すると約55万となり、これが生まれ故郷を後にした者の数といえる。第1表は、1850年と1880年のニュー・ヨーク州について、人口移動の観点からまとめている。

この表では、ニュー・ヨーク州生まれの者と、同州に住んでいる者との2グループに大別されている。1850年、国内に住む同州生まれの者の総数は約270万、そのうち約55万は他州へ移住してしまっている。同年、ニュー・ヨーク州の人口は約310万であるから、差し引きプラスで、人口流出州とはいえないように見えるが、実は流入人口の多くは外国移民であった。したがって、国内での

第1表 ニュー・ヨーク州の人口

	1850年	1880年
(A) N. Y. 州生まれの人口*	2,698,414	4,753,547
(B) その内、同州在住者	2,151,196	3,556,394
(C) その内、他州在住者	547,218	1,197,153
(D) N. Y. 州在住人口	3,097,394	5,082,871
(E) その内、他州出生者	288,100	315,098
(F) その内、外国移民	658,098	1,211,379
B/A	79.7%	74.8%
B/D	69.5%	70.0%
E/D	9.3%	6.2%
F/D	21.2%	23.8%

\*アメリカ国内居住者中、N. Y. 州出生者。

資料：U. S. Census, 1850, 1880.

外国移民は他州生まれの約3倍であるから、国内移動という点では、やはり移住者の供給源たりつづけたことになる。移住先は主に西部で、ミシガン、イリノイ、ウィスコンシン、アイオワ、オハ

移動ということを考えると、ニュー・ヨークは流出州であった。その移住先は、第1表には示していないが、ペンシルヴァニアやニュー・ジャージーなど近隣の東部諸州が約12万、南部諸州が2万4千、残りの40万以上が、オハイオ、ミシガン、インディアナ、イリノイなどの西部であった。1880年においても、大勢に変化はなく、ニュー・ヨーク生まれ480万のうち、120万は移住してしまっている。流入人口のうち、

注(7) Lowell E. Gallaway and Richard K. Vedder, "Mobility of Native Americans," *Journal of Economic History*, XXXI (1971), 613-649. はアメリカ全体についての研究である。ただし、本稿とは関心は異なる。

イオの5州で、約58万、移出者の約半数をしめている。

結局、第1表で見ると、19世紀の前半から後半にかけて、ニュー・ヨーク州は自州生まれの人口の、約20%から25%を失っていたことになる。しかも、その大半は中西部諸州への移住者であったから、西漸運動の供給源になったことは確かであろう。しかし、この表は、何といてもニュー・ヨーク州全体についての数字であって、東部農村の側から考えるという立場からすると、十分満足できるものではない。19世紀中葉には、すでにニュー・ヨーク市は60万以上の人口を有し、隣接するブルックリンにも、約20万の市民が存在した。さらに、首都オルバニー、バッファロー、ロチェスター、トロイ、シラキューズ、ユティカなど、それぞれ数万の人口を有する商工業都市も州の各地に存在していた。もし、かつてターナー学派の人々が考えたように、東部の都市労働者が西部へ移住したのであれば、農村ではどうであったか。また、より可能性の高いこととして、ニュー・ヨーク州農村からは、州内の都市への移住者も多かったのではないか。

先に、東部の農業雑誌等が西部への人口流出を憂えたことと記したが、農業関係者にとっては、都市への流出も問題であり、とりわけ農村の若者が都会に憧れることが問題であった。1852年、ニュー・ヨーク州農業協会会長ヘンリー・ウェイジャー (Henry Wager) は、大会演説で農業の徳を称えた後に次のように述べる。「しかし、われわれが常に出会う問題は、この正しい労働が卑しいものなのではないかという怖れである。かかる間違った考え方を決してのさばらせてはならない。……ただわれわれの若者が農場を見捨て、事務所や商店で働くことを切望している、という事態をみると、こうした誤りが、かなり多くの農民の家庭にはびこっていることがわかる。」「……私は自分の息子を農民にした。私は彼を大学へ行かせることもできたが、そうしたならば、……農民の男らしい生活<sup>(8)</sup>を恥じるようになって戻ってきたかもしれない。」筆者は以前、ニュー・ヨークからアイオワへ移住した農民について調べたことがあるが、彼も一度はニュー・ヨーク市で就職することを望んだのであった。<sup>(9)</sup>

また、ニュー・ヨーク州内部の農村から都市へ、というわけではなく、同じ農業に従事しつつも州内で移住するという場合もある。ニュー・ヨークからアイオワへ移住した若者の父親は、同州東部のグリーン郡から、西側のオンタリオ郡へ移ったし、別の機会に研究したことがある酪農農民は、マディソン郡からルイス郡へ、さらにオスウィゴ郡へと移動している。<sup>(10)</sup>『貧困の谷間を通して』と題する書物は、ヘンリー・コンクリンが、ニュー・ヨーク農村における青少年時代を回顧した、きわめて興味深い読み物であるが、彼の一家は、やはり州内で何回もの移住をくり返している。こう

注(8) New York State Agricultural Society, *Transactions* (1852), pp. 194, 197.

(9) 岡田泰男「ニュー・ヨークからアイオワへ——ある農民の西部移住——(上・下)」(『三田学会雑誌』67巻7号, 8号, 1974年)。

(10) 岡田泰男「一農民の日記より見たるニュー・ヨーク農業の変遷」(『三田学会雑誌』64巻8号, 1971年)。

(11) Henry Conklin, *Through Poverty's Vale: A Hardscrabble Boyhood in Upstate New York, 1832-1862*, ed. Wendell Tripp (Syracuse, N. Y., 1974).

## 西漸運動と東部農村

いう風に考えてくると、やはり第1表は事態の一面しか示しておらず、州の内部での人口移動を調べる必要を感じる。これは連邦センサスからはわからないが、幸いなことにニュー・ヨーク州のセンサスを利用すれば調査可能である。

連邦センサスは、1850年、60年、70年というように10年おきに調査されたが、ニュー・ヨーク州センサスは、1855年、65年、75年という具合に、その中間年度に、やはり10年おきにとられている。州センサスには、連邦センサス同様、出生地が記されており、州内で出生した者については出生郡がわかる。次に、55年と75年の州センサスを利用して、州内の人口移動について眺めてみよう。

## II. ニュー・ヨーク州内の人口移動

ニュー・ヨーク州はエンパイア・ステイトという名の示す如く広大な州であり、当時、60郡からなっていた。地理的にも多様性を有し、かつ、すでに記した如く都市化も進んでいた。したがって、いくつかの郡をサンプルにとるといっても、どの郡が適当であるかを定めることは容易でない。とはいえ、全郡について調べることも、あまり意味があるとは思えないので、州内での移動の方向、とくに農村から都市への移動の状況をも見るため、都市的な郡と農村的な郡を、州の東部、中央部、西部にわたり、計10郡選ぶこととした。とりあえず、1855年に人口2万以上の都市を有する郡を都市的な郡として選び、その近隣の都市化が進んでいない郡を農村的な郡として選ぶ。次に地理的バランス、同時に農業パターンの上でのバランスを考えて、10郡にしぼる。その結果が第1図の斜線をひいた諸郡（都市は黒点）である。（なお、ニュー・ヨーク郡の場合には、ニュー・ヨーク市の市域が郡<sup>(12)</sup>の全体をしめている。）

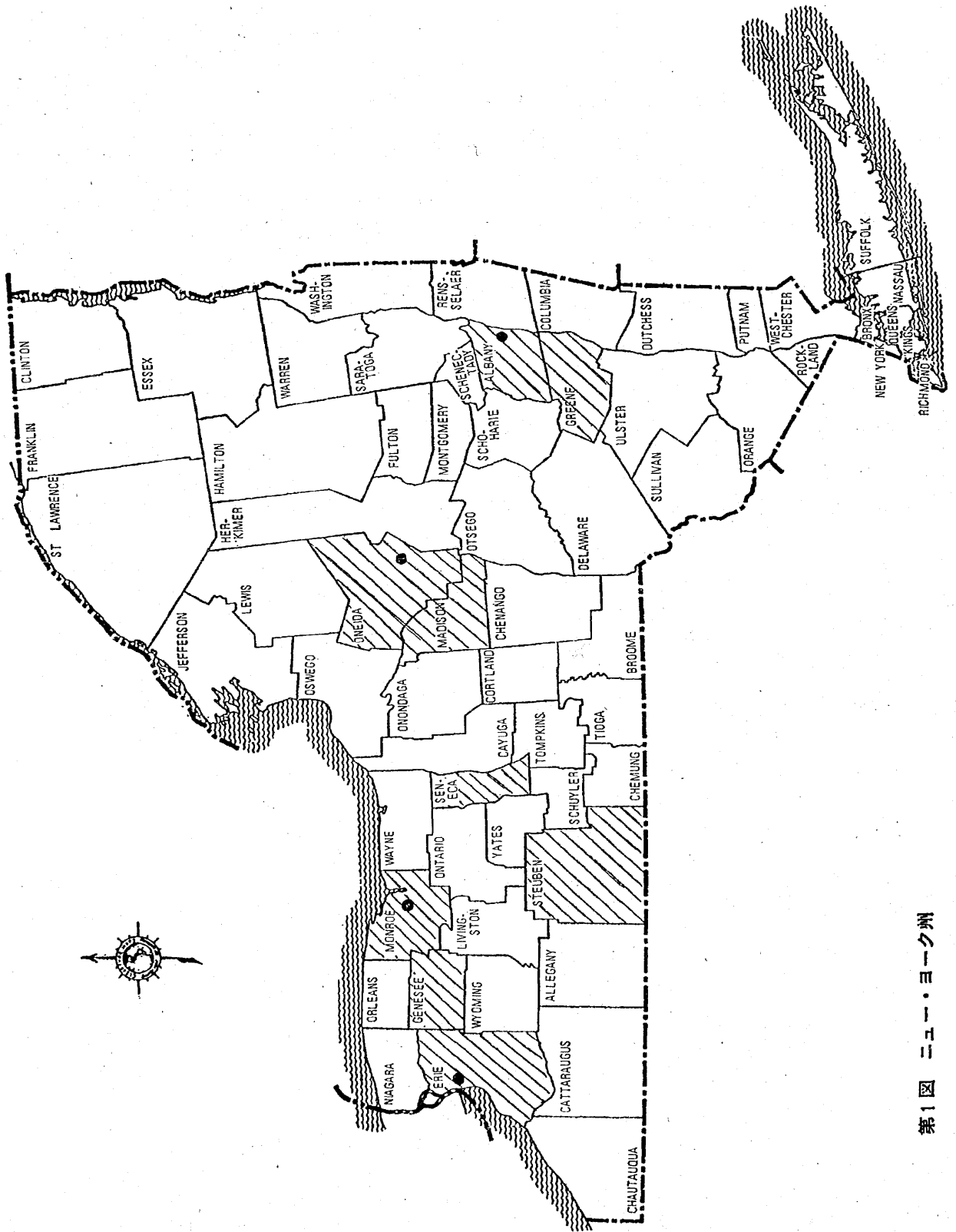
農業パターンからいうと、州東部、とくにハドソン河沿いは、かつては小麦生産も盛んであったが、19世紀中葉には畜産に主力が移っている。ただ山地も多く、農業的にあまり豊かな地域とはいえない。州中央部は酪農中心の地域、西部は穀作が主で、この時期においても、小麦生産がかなり<sup>(13)</sup>おこなわれていた地域といえることができる。

第2表は、1855年の各郡の人口が、出生地別に見て、いかなる構成をもっていたかを示している。

注(12) 1855年、人口2万以上の都市は下記の通り。

都市(郡名)	人口
New York City (New York County)	629,810
Brooklyn (Kings County)	205,250
Buffalo (Erie County)	74,214
Albany (Albany County)	57,333
Rochester (Monroe County)	43,877
Troy (Rensselaer County)	33,269
Syracuse (Onondaga County)	25,107
Utica (Oneida County)	22,169

(13) 州センサスは農業統計をも含んでいる。



第1図 ニュー・ヨーク州

西漸運動と東部農村

上の5郡が農村的な郡、下の5郡が都市的な郡であり、後者の場合、郡全体の数字の下に、都市のみについての数字が記されている。表の数字はすべて割合（パーセント）であって、右端の欄にのみ総人口が実数で示されている。なお、総人口の数字のうち、都市に関する部分は内数である。すなわち、オルバニー郡の場合、郡全体の人口は103,681、そのうちオルバニー市の人口が57,333というわけである。この欄を見れば明らかなように、ニュー・ヨーク郡（すなわちニュー・ヨーク市）を別とすれば、都市的な郡といっても、都市の人口は郡全体の約半分くらいであり、オナイダ郡の場合など、ユティカ市は存在するが、農村的色彩も濃いことは否定できない。

第2表 ニュー・ヨーク州内諸郡の出生地別人口構成（1855年）

郡名（都市名）	同郡	N. Y. 州内の他郡	他州	外国	合計
農村的な郡					
Green	67.8%	19.9	4.6	7.7	100.0 (31,137)
Madison	53.9	24.0	12.1	10.0	100.0 (43,687)
Seneca	55.5	20.4	12.8	11.3	100.0 (25,358)
Steuben	64.5	18.0	13.1	4.4	100.0 (59,099)
Genesee	39.7	24.8	14.5	21.0	100.0 (31,532)
都市的な郡					
Albany	49.7	13.3	4.2	32.8	100.0 (103,681)
(Albany city)	44.3	11.1	4.2	40.4	100.0 (57,333)
Oneida	45.9	17.5	7.9	28.7	100.0 (107,749)
(Utica)	36.7	14.7	5.9	42.7	100.0 (22,169)
Monroe	38.1	17.9	9.5	34.5	100.0 (96,324)
(Rochester)	33.2	14.4	8.2	44.2	100.0 (43,877)
Erie	37.6	13.0	8.1	41.3	100.0 (132,331)
(Buffalo)	32.3	11.7	6.4	49.5	100.0 (74,214)
New York (city)	36.8	4.8	6.6	51.8	100.0 (629,810)

資料：N. Y. State Censuss, 1855.

さて、第2表を見て、まず気付くことは、19世紀中葉のニュー・ヨーク州諸郡において、人口のかなりの部分が外部からの移入者でしめられていることであり、とくに都市的な郡ほどその傾向が著しい。また、都市的・農村的を問わず、州西部とりわけエリー運河ぞいのジェネシー、モンロー、エリー諸郡に移入者の要素が多いことも注目される。ところで移入者の内容を見ると、農村的な郡と都市的な郡では大きな相違がある。前者では、州内の他郡あるいは他州からの移住者が多く、約25%から40%をしめているが、後者では外国移民が多く、30%から40%をしめ、とくに都市においては、40%から50%が外国移民である。ニュー・ヨーク郡（市）においては、すでに住民の過半数を外国移民がしめていた。したがって、国内出生者が、州内あるいは他州へ移住する場合には農村的な郡へ向い、外国からの移民は都市的な郡へ向う傾向があったといえるのではないか。

次の第3表は、1875年における状態を示したものであるが、全体としては、第2表から得た印象



第3表 出生地別人口構成(1875年)

郡名(都市名)	同郡	N. Y. 州内の他郡	他州	外国	合計
Green	69.3%	20.0	2.9	7.8	100.0 (32,592)
Madison	57.6	25.3	7.0	10.1	100.0 (42,324)
Seneca	57.1	21.6	7.6	13.7	100.0 (28,138)
Steuben	58.4	23.1	9.4	9.1	100.0 (73,838)
Genesee	49.5	24.3	8.1	18.1	100.0 (32,245)
Albany	54.0	13.8	4.0	28.2	100.0 (147,663)
(Albany city)	53.2	12.0	4.1	30.7	100.0 (86,541)
Oneida	56.5	16.1	4.8	22.6	100.0 (114,335)
(Utica)	49.5	14.3	4.1	32.1	100.0 (32,496)
Monroe	49.9	15.1	5.7	29.3	100.0 (134,884)
(Rochester)	47.8	13.3	5.3	33.6	100.0 (81,722)
Erie	52.8	8.5	5.2	33.5	100.0 (197,902)
(Buffalo)	49.5	7.5	5.0	38.0	100.0 (134,557)
New York (city)	47.7	3.8	5.7	42.8	100.0(1,041,886)

資料: N. Y. State Census, 1875.

が、一層強められる感じを受ける。すなわち、国内とくにニュー・ヨーク州内における移住者は農村的な郡へ、外国移民は都市的な郡へ、という傾向である。もっとも第2表と比較してみると、他にも目立つ点がある。まず総人口の欄では、1855年から75年までの20年間(その中間に南北戦争がはさまれている)に、農村的な郡では、ほとんど人口は変わらず、都市的な郡では、かなり人口が増加している。とくに都市人口の成長が著しいことがわかる。出生地別に見ると、農村的な郡でも都市的な郡でも、郡内で生まれた者の比重が増大しており、いわば安定化傾向が見られる。(農村部のスチューベン郡のみ、人口増大、他からの流入増加が見られるが、これは同郡が山間の森林地帯で、19世紀中葉にいたるまで開墾がおくっていたためである。)農村的諸郡において、州内移住者のしめる割合は、ほぼ同一か、わずかに増加しているが、他州からの移住者は減少している。これは、ニュー・イングランド諸州からの人口流入が、19世紀半ばまでに峠を越したためであろう。他方、都市的な郡における外国移民の割合減少は、南北戦争中移民が減ったということもあるが、外国移民の子供でも、ニュー・ヨーク州に着いてから生まれた者は、同州(同郡)生まれとして記録されたためと思われる。なお、州西部のエリー運河ぞい諸郡に、他からの移入者が多いという傾向は残っており、大きな意味での人口の西漸は、ニュー・ヨーク州内でも見られたといえるのではないだろうか。このことは、州東部の郡に生れ、西側の郡に住んでいる者の方が、その逆のケースよりも多い事実からも確かめられるが、詳しくは後に述べる。

さて、第2、3表においては、いわば人口移動の受入れ側、もしくは到着点としてのグリーン郡以下10郡を示したが、次に出発点あるいは送り出す側としての10郡という角度から考えてみたい。ただし、州センサスからは州外への移出者についての数字はつかめないの、上記諸郡に生まれ、

西漸運動と東部農村

かつニュー・ヨーク州内に居住している者についてしか考察できない。すでに第1表で示した如く、当州に生まれ、他州に移住した者の数は、1850年で50万以上、1880年には100万以上にのぼっているわけであるから、ここでの考察は十分なものとはいえない。ただ、州外移住者が多かったとはいえ、ニュー・ヨーク州に生まれ、そのまま州内に住んでいた者も、1850年に約200万、1880年には350万存在したわけであるから、これらの人々を対象として、州内における移住の状況を見てみたい。

第4表は、1855、75年の両年度について、まず各郡に生まれ、かつニュー・ヨーク州内に住んでいる者の総数を示し、次に、生まれた郡に留まっている者の割合を示したものである。たとえば、

第4表 出生者と在住率

郡名	1855年		1875年	
	出生者数*	出生地在住率**	出生者数*	出生地在住率**
Green	32,849	64.3%	33,720	67.1%
Madison	35,333	66.7	36,676	66.5
Seneca	19,926	70.7	22,754	70.6
Steuben	38,785	98.3	53,761	80.2
Genesee	19,023	65.7	22,258	71.8
Albany	76,337	67.6	105,313	75.7
Oneida	70,365	70.3	87,451	73.9
Monroe	46,244	79.4	78,506	85.7
Erie	55,597	89.5	114,890	91.0
New York	297,164	78.1	627,024	79.4

\* 各郡出生者中、当該年度に州内に居住している者。

\*\* 上記のうち、出生郡に居住している者の割合。

資料：N. Y. State Census, 1855, 1875.

1855年のグリーン郡の場合、同郡に生まれて州内に住んでいる者は32,849、そのうち、同年に同郡に住んでいる者は21,124（この実数は表には示していない）で、出生者の64.3%にあたるというわけである。なお、第2表との関連でいえば、この21,124人が、1855年のグリーン郡人口の67.8%にあたる（第2表左端の欄の数字）ことになる。

1855年について見ると、農村的な郡では、スチューベン郡を例外として、60~70%が生まれた郡に留まっており、都市的な郡では、エリー郡を除くと、70~80%が生まれた郡に居住している。これを逆にいえば19世紀の中葉、農村部では人口の30~40%、都市部では20~30%が、州内での移住を経験したことになり、他州への移出におとらず、州内での人口移動が盛んであったことがわかる。もちろん、同じ郡内での移動という事態もあり得たはずであるし、生まれた郡から移出した者が、さらに移動をくりかえしたことも考えられる。また、出生郡に在住している者の中には、いったんは他郡へ移住し、もう一度生まれ故郷へ戻ってきた者もいるかもしれない。したがって、農村部3,40%、都市部2,30%という数字は、いわば州内移動の最小限を表わすものといってよい。また、

ニュー・イングランド諸州で生まれて、ニュー・ヨーク州へ移住してきた者が、当州内部で移住をくりかえしたり、外国移民が州内移動をしても、第4表には部分的にしか反映されない(当州へ移住後に出生した子供のみ)から、本来の人口移動の姿はもっと激しいものであったに相違ない。

1875年になると、出生郡に留まっている者の割合が、農村部では65~80%、都市部では75~90%と高まっており、先に第2、3表を比較した際に述べた如く、安定化傾向がみられるといえる。ところで、注目すべき点は、1855年においても75年においても、農村的な郡の方が、都市的な郡よりも、移出率が高いことである。すでに第2、3表で示した如く、農村郡は都市郡に比して、州内他郡からの移入者の割合が高かった。したがって、州内移動に関するかぎり、移住者を送り出す側としても、受け入れる側としても、都市的な郡よりは農村的な郡の方が重要であったといえる。言葉をかえれば、ニュー・ヨーク州内の人口移動の主役は、都市労働者よりは農民であり、しかもその方向は、農村から農村へという動きであったという印象を受ける。この点については、さらに議論をつめてゆきたいが、とりあえず、これまでの一応のまとめとして記しておく。

### III 州内人口移動の方向

ニュー・ヨーク州において、州内出生者の移動状況を見ると、移出率、移入率ともに農村的な郡の方が、都市的な郡よりも高かった。この事実は、当時のニュー・ヨーク農村において、州内移住が、西部諸州への移住と同様もしくはそれ以上に重要であったことを物語っている。西部農業との競争に破れ、遠い西部の安い土地にひかれて移住した農民も多かったが、州内で近距離の移動をした農民は、さらに多かったといえるであろう。ところで、かかる州内人口移動には、どんな方向があったのであろうか。先に、西部エリー運河ぞい諸郡に移入者が多いことを指摘したが、地理的にいって東から西へという方向をとっていたか否かを、まず検討したい。さらに、農村から農村へ、という方向が強かったとしても、農村から都市へ、という方向もやはり存在したのではないかという疑問が残っている。この点についても、もう少し検討してみたい。

第5表は、1875年の前記10郡について、州内他郡への移出者数と、州内他郡よりの移入者数を記し、そのプラス・マイナスを示したものである。実数を記したのは、人口移動の実際の規模を示すためである。第3欄の数字がマイナスであれば、州内移動に関して人口流出郡、プラスであれば流入郡であることは、いうまでもない。

さて、第5表に明らかな如く、農村的な郡にも、都市的な郡にも、流出郡と流入郡が存在していることからして、州内出生者に関する限り、農村は人口を失い、都市は人口を増したということはいえない。人口流入郡は、スチューベン、ジェネシー、モンロー、エリーの4郡であるが、これらは第1図を見れば解るように、いずれも州西部の郡である。したがって、この表が示している事実

西漸運動と東部農村

第5表 州内移動の状況 (1875年)

郡名	(A) 他郡への移出者数	(B) 他郡からの移入者数	(B)-(A) 移出入の差	隣接諸郡からの移入者(割合)
Green	11,091	6,510	-4,581	75.1%
Madison	12,287	10,702	-1,585	62.5
Seneca	6,686	6,079	-607	42.9
Steuben	10,621	17,059	+6,438	36.4
Genesee	6,284	7,825	+1,541	53.1
Albany	25,540	20,423	-5,117	55.6
Oneida	22,856	18,438	-4,418	47.8
Monroe	11,262	20,369	+9,107	29.5
Erie	10,387	16,774	+6,387	31.4
New York	129,452	39,230	-90,222	50.3

資料：N. Y. State Census, 1875.

は、アメリカ全体においてと同様、ニュー・ヨーク州内部においても、いわばミニ西漸運動が進行していたことを物語っている。<sup>(14)</sup>

ところで、アメリカ全体の西漸運動の場合には、長距離移住は少なく、短距離移住、具体的には近隣諸州への移住が多かったといわれている。<sup>(15)</sup> ニュー・ヨーク州内での移住が盛んにおこなわれていたことは、短距離移住が主流であったという説を裏付けるものであるが、ここでは視野を狭め、州内移住に際しても短距離の場合が多かったか否かを調べてみよう。具体的には、他郡からの移入者中、隣接諸郡からの移入者が、どれくらいの割合をしめていたかを調べ、その率が高ければ高いほど、短距離移動が多かったことが解るわけである。第5表の右端の欄の数字(パーセント)は、その率を示している。

たとえば、グリーン郡の場合、隣接する郡は第1図に示した如く、コロンビア、アルスター、デラウェア、スコヘリ、オルバニー、レンセラーの諸郡である。1875年の他郡からの移入者6,510(第5表第2欄)中、上記諸郡からの移入者は、4,888(実数は表には示していない)であり、全体の75.1%(第5表第4欄)をしめていた。この事実は、グリーン郡への移入者についてみるかぎり、州内移動においても、短距離が主であったことを示している。しかし、他の郡の場合をみると、グリーン郡についての上の結論が、必ずしもあてはまらないことが解る。農村的な郡と、都市的な郡との差は、とくに目立たないが、第3欄と第4欄の数字に注意すると、ひとつ気がつく点がある。それは、第3欄がプラス、すなわち人口流入郡である場合に、隣接諸郡からの移入者率が低いということである。言葉を変えれば、移入者の多い郡ほど遠くの郡から移住してくる者が多い、といえるであろう。そして、州内移住に関するかぎり、短距離移動が主流とはいえない、という結論を出し

注(14) 1855年センサスにおいても「州内の移住の方向はWestwardである」と調査官が記している。N. Y. State Census (1855), Introduction, p. xxxix.

(15) このことは、すでに、1860年の連邦センサスで指摘されている。U. S. Census (1860), Population, Introduction, p. xxxv.

てもよいであろう。

これは一寸考えてみれば、別に不思議なことではない。アメリカ全体の場合、あまり遠方の州へ移動しないのは、情報の不足、リスクの大きさ、移住費用の高さなどから、一応当然のことと思える。しかし、ニュー・ヨーク州内であれば、そうした点は遠方であろうと近くであろうと大差ない。しかも、小麦の不作、病虫害などが移住の動機である場合には、隣りの郡へ移ってみても、事情はそう変らぬはずであり、結局、無意味ということになる<sup>(16)</sup>。したがって、西方への移動という点では、全国的な動きと州内のそれとは軌を一にしていたが、距離の点では事態は異なっていたといえる。

さて、ニュー・ヨーク州内での西への動きは、農村的な郡にも都市的な郡にも共通するものであったが、その内容は農民的なものであったと思われる。州西部のロチェスターやバッファローも大きな都市ではあったが、何と云っても、この州にはニュー・ヨーク市が存在するのであって、都市への移住ということであれば、ここを目指すのが当然と考えられるからである。州内移住に関するかぎり、距離の遠近はあまり問題ではなかったし、交通の便という点からすれば、ニュー・ヨーク市への交通は最も早くから発達していた。他方、農業的機会という観点から見ると、19世紀中葉、すでに州東部のハドソン河沿いでは小麦生産は衰えていたが、州西部ではまだ可能であったし、地味の点でも西部諸郡の方が豊かであった。それ故、東部諸郡の農民が、西方の郡へ移住しても不思議はない<sup>(17)</sup>。

ただ、州内において農村から都市への動きもあったことは否定できず、農民が西部の農村へのみ移住したとはいえない。そこで、都市の吸引力がどの程度のものであったかを、ここで見ておきたい。先に示した如く、ニュー・ヨーク市は、1855年、すでに60万を越える人口を有し、流入者のほとんどが外国移民であったとはいえ、州内他郡からの移住者も3万を数えた。3万といえば、当時の農村的な郡の人口規模にほぼ等しく、1郡の住民がすべて移住してきたほどの大きさである。これは、州内移住の観点からすれば、見落すことはできない。ニュー・ヨーク市の持つ魅力は、19世紀半ばにおいてもかなり大きなものであったといえよう。

それでは、州内のどんな郡が、ニュー・ヨーク市への移住者を多く送り出したのであろうか。1855年の時点で、同市への移住者を1,000名以上送り出していた郡は10郡あり、これを第6表に示してある。最大の移住者供給源であったウエストチェスター郡をはじめとして、これら10郡は、いずれもニュー・ヨーク市に近い地域にあり、ほとんどはハドソン河沿いの郡である。もちろん、同市には、もっと西側の郡からの移入者も存在したが、大きな意味での西への動きを逆流させるほどの力はなかったといえよう。さらに、上記10郡の場合にも、ニュー・ヨーク市の吸引力が絶対的で

注(16) 小麦不作や病虫害については、とりあえず次を見よ。Paul W. Gates, *The Farmer's Age: Agriculture, 1815-1860* (New York, 1960), pp. 163-4.

(17) ニュー・ヨーク州西部の農業については、Neil Adams McNall, *An Agricultural History of the Genesee Valley, 1790-1860* (Philadelphia, 1952).

西漸運動と東部農村

第6表 ニュー・ヨーク市への移住者 (1855年)

送り出し 郡名	(A) N. Y. 市 への移住者	(B) 他郡への 移住者総数	(A)/(B)
Albany	2,158	24,723	8.7%
Columbia	1,035	18,436	5.6
Dutchess	2,753	27,493	10.0
Kings	2,556	6,914	37.0
Orange	3,176	18,350	17.3
Queens	1,616	7,106	22.7
Rockland	1,029	2,942	35.0
Suffolk	1,248	4,770	26.2
Ulster	1,309	11,515	11.4
Westchester	4,825	12,802	37.7

資料：N. Y. State Census, 1855.

あったわけではない。

たとえば、ウエストチェスター郡の場合、他郡への移出者総数は12,802、そのうちニュー・ヨーク市への移住者は4,825 (37.7%) にすぎない。同郡は、今日では市の郊外住宅地であり、通勤区域とい

ってよいが、そのウエストチェスターからの移出者ですら、3分の2は、目を西へ向けていたのであった。

第6表の第2欄は、これらの郡から他郡へ移出した総数であり、そのうち、ニュー・ヨーク市への移住者(第1欄)が何パーセントをしめるかを示したのが第3欄である。ここに明らかな如く、同市への移住者が30%を越えるのは、ウエストチェスター、キングス、ロックランドの3郡にすぎない。ニュー・ヨーク市に近く、かつ同市への移住者の最大供給源であった東部諸郡の人々にとっても、この大都市よりは、農村地域の方が吸引力が強かったといえる。

ニュー・ヨーク市は、ある意味では例外であるから、他の都市では事情が異なるかもしれない。それ故、オルバニー、ユティカ、ロチェスター、バッファローについても、その吸引力の強さを調べておこう。これらの都市が、ニュー・ヨーク市の場合とは異なり、郡の一部をしめるにすぎないことは、先に述べた通りである。したがって、これまでは、たとえばオルバニー郡への移住者すべてを、都市的な郡への移住者として扱ってきたが、その中には、都市そのものへの移住者と、市域外の農村地区への移住者とが含まれていた。そこで、第7表では、両者を区別し、都市そのものへの移住者が、郡全体への移住者中、どれくらいの割合をしめていたかを調べてみたい。こうすることによって、都市自体、言葉を変えれば都市的生活ないし都会的職業の持つ吸引力が解るであろう。

第7表では、第6表と同様に、1855年の時点で特定の都市への移住者が多い郡を、まずひろい出してみた。ただしニュー・ヨーク市の場合と異なり、1郡から1,000人以上を送り出しているという例はないので、とりあえず300人以上ということにする。たとえば、オルバニー市への移住者を300人以上送り出している郡は、8郡であって、コロンビア郡は487人、ダッチェス郡は354人という具合である。第2欄は、それらの郡から、オルバニー郡へ移住した者の総数であり、第3欄は、そのうちオルバニー市へ流入した者が何パーセントをしめるかを示している。コロンビア郡からの移住者について見れば、当郡へは計1,009人が移住しており、前記487人は、その48.3%にあたるわ

第7表 各都市への移住者(1855年)

送り出し郡名	(A) 都市への移住者	(B) 郡への移住者	(A)/(B)
Albany City (Albany 郡)			
Columbia	487	1,009	48.3%
Dutchess	354	893	39.6
Green	306	1,096	27.9
New York	919	1,157	79.4
Rensselaer	915	2,442	37.5
Saratoga	371	1,078	34.4
Schenectady	414	894	46.3
Schoharie	362	1,129	32.1
他郡総計	6,343	13,790	46.0
Buffalo (Erie 郡)			
Albany	425	585	72.6
Genesee	339	1,135	29.9
Monroe	598	835	71.6
New York	935	1,095	85.4
Oneida	319	700	45.6
他郡総計	8,678	17,161	50.6
Rochester (Monroe 郡)			
Livingston	311	943	33.0
New York	521	832	62.6
Oneida	421	885	47.6
Ontario	409	1,275	32.1
他郡総計	6,337	17,229	36.8
Utica (Oneida 郡)			
Herkimer	604	3,223	18.7
New York	329	1,061	31.0
Otsego	300	1,382	21.7
他郡総計	3,253	18,822	17.3

資料: N. Y. State Census, 1855.

の吸引力を持っていたバッファローですら、同市の存在するエリー郡への移住者の半分を市域内に引きつけえたにすぎず、ユティカの場合には、移住者中2割以下が市内居住者になったのみであった。しかも、各郡への移住者数をみると、都市としては最小のユティカを有するオナイダ郡への移入者が最大(18,822人)というのも皮肉な話である。

農村から都市への移住といえば、当然、農業から商工業へという変化を考える。農村の若者が憧れたのも「事務所や商店で働く」機会であった筈である。しかし、第7表を見ると、都市的な郡への移住者の大半は、都市への移住者、あるいは非農業的の就業機会にひかれての移住者ではなかった。

けである。なお、最下段は、ニュー・ヨーク州内他郡からの移住者の合計であり、全体として、州内移住者の46.0%がオルバニー市に住み、残り(54.0%)は市域外の地区に住んでいることを示している。

さて、1855年度における各都市の人口は、第2表に示したが、オルバニーが約6万、バッファローが7万、ロチェスターが4万、ユティカが2万であった。300人以上の移住者が入ってきた郡の数からいうと、オルバニーが1位であるが、全体としての都市の吸引力は、その人口規模に比例していたということができる。とはいえ、最大

彼等の多くは、多分、都市というマーケットの存在にひかれた農民であり、都市の近くで農業を続けることを望んだのではないだろうか。19世紀中葉における都市の居住形態は職住一致、もしくは職住近接<sup>(18)</sup>であって、市外からの通勤などということは考えられなかったからである。

ところで、第7表で注目されるのは、ニュー・ヨーク郡(市)からの移住者である。オルバニーやバッファローには900人以上、ロチェスターに500、ユティカにも300のニュー・ヨーク市生まれの者がいた。もちろん、それぞれの郡には、もっと多くのニュー・ヨーク市出身者がいたわけであるが、彼等が特異な点は、移住者中、都市内への移入者の割合が著しく高いことである。オルバニーの場合、郡への移住者中79%、バッファローでは85%、ロチェスターでも63%が、市内に住んでいる。ユティカでは31%にすぎないが、それでも他からの移住者に比べると、市内居住者が多い。何も大都会から地方都市へ移らなくとも、という感じもするが、そうではあるまい。むしろ、ニュー・ヨーク市で身につけた仕事を、地方都市で続けられれば、さすが本場仕込みということになるかもしれない。都市出身者は、地方に移住しても、都市的生活を求め、商工業従事者は移住先でも商工業に従事するという事柄ではないか。

こうした目で第7表を眺めると、他にも上記の印象を強めるような事実に気付く。たとえばバッファローの場合、他郡からの移住者中、市内居住者は全体では50.6%であるが、オルバニー郡(オルバニー市がある)からの移住者では73%、モンロー郡(ロチェスター市がある)からの移住者は72%が市内に住んでいる。それに比して、農村的なジェネシー郡から来た者は、その3分の1以下が市内に住んでいるにすぎない。そうしてみると、農村から農村へ、という人口の流れと同時に、都市から都市へ、という動きがあったようである。都市で身につけた職業を生かす、という積極的な意味でも、都市労働者が農場主にはなれない、という消極的な意味でも、都市から都市へという流れは、大いにありうることなのである。<sup>(19)</sup>

#### IV ニュー・ヨーク州農民の動向

われわれは、東部から西部への移住者を追って、東部の中での人口移動を見出し、農村から都市への移動を求めて、農村から農村へ、都市から都市へという流れを見出した。もちろん、以上は出

注(18) Sam Bass Warner, Jr., *The Urban Wilderness: A History of the American City* (New York, 1972), pp. 81-84.

(19) かかる結論は、ミラーのツラキューズについての研究や、カツのエリー郡についての研究とも一致する。ミラーによれば、農村から都市への移住者の場合でも、その多くは、農村にあってすでに商業などに従事していた人々であった。Roberta Gay B. Miller, "City and Hinterland: The Relationship between Urban Growth and Regional Development in Nineteenth-Century New York," Ph. D. diss. (University of Minnesota, 1973); Michael B. Katz et al., "Migration and the Social Order in Erie County, New York: 1855," *Journal of Interdisciplinary History*, VIII (1978), 669-701.



生地と居住地についての資料にもとづく考察であるので、農民は農業を捨てず、都市労働者は農場主になれなかったと、ただちに結論することはできない。しかし、そうした推論はまったく的はずれであるとも思わない。

19世紀前半にニュー・ヨーク州の農村に生まれた人々にとって、故郷を離れ移住することは、特別のこととはいえなかった。しかし、当時、都市化が進み、農業が下り坂であったとはいえ、彼等が農村を離れ、都市へ向かうという傾向はあまり見られなかった。彼等は、州の西側の農村へ向かうか、中西部諸州へ移住したのである。これには、都市という見知らぬ環境への恐れがあったと考えられるが、そこに言語、宗教、風習の異なる外国異民が大量に存在することが、その恐れを増幅し、都市への反感を強めたものとも思われる。このことは、逆からいえば、当時の都市化さらには工業化に必要な労働力の供給源として、離村した農民よりも、外国移民が重要であったことを暗示しているかもしれない。

一方、都市労働者が西部へ移住して農民になったか、という点については、従来の研究も否定的結論を出しているが、ニュー・ヨーク州の場合も、それを裏付けている。農村的な郡よりも、都市的な郡の方が、そこに出生し、定住している人々の率が高いことは、一寸意外な感じもするが、都市からの脱出の困難さを物語っているといえよう。しかも、出生定住率は、1855年よりも1875年の方が高くなっているのであって、これを先には安定化傾向と呼んだが、都市の住民にとって西部開拓や農村への移住が、次第に無縁の出来事となっていったことを示すものであろう。「西部の公有地を東部労働者に与えよ」と叫んだジョージ・エヴァンス (George H. Evans) の公有地制度改革運動は、ニュー・ヨーク市を本拠地としていた<sup>(20)</sup>。しかし、そのニュー・ヨーク市においては、出生者の80%近くがそこに留まっていたし、州内で移出した者も多くは都市へ向かったのであった。<sup>(21)</sup>

ところで、農村から農村へ、という移住パターンの裏には、二種類の行動様式があったように思われる。ひとつは、東部では続けられなくなった穀作を、西方へ移住することによって、そのまま続けようというものである。西部諸郡、さらには西部諸州への移住者の多くは、かかる農民であったろう。ニュー・ヨーク州からアイオワへ移住した農民が、当初は移住前とまったく同様な農作物をつくらうとしたことは、別の機会に述べた通りである<sup>(22)</sup>。さて、もうひとつの方法は、市場の変化に合わせて農業を変えるものであり、都市近郊の農村地区への移住は、かかる傾向を示しているものと思われる。都市市場向けの園芸農業、蔬菜栽培、ミルク生産などは、すぐ思いつくものである

注(20) Helene Sara Zahler, *Eastern Workingmen and the National Land Policy, 1829-1862* (New York, 1941).

(21) これは、都市内部での移動率の高さを否定するものではない。Stephan Thernstrom and Peter R. Knights, "Men in Motion: Some Data and Speculations about Urban Population Mobility in Nineteenth-Century America," in Tamara K. Hareven, ed., *Anonymous Americans: Explorations in Nineteenth-Century Social History* (Englewood Cliffs, 1971).

(22) 岡田「ニュー・ヨークからアイオワへ」を見よ。

### 西漸運動と東部農村

が、都市は同時に、たきぎや、わらを大量に必要としたのであって、農民には副収入をももたらした。かかる副業としては、製粉業や製塩業の発達にともなう樽造りなども重要であった。<sup>(23)</sup>

もちろん、後者の方法は、移住せずにも可能であった。交通機関の発達によって、ニュー・ヨーク州内であれば、都市向けの生産は近郊農村でなくともできたからである。たとえばセネカ郡は、第1図に示す如く州中央部にあったが、同郡の農民が、クリスマスの時期になると、ニュー・ヨーク市に向けて、七面鳥を出荷した記録がある。当時の農民は、必ずしもクリスマスに七面鳥を食べていたわけではないので、これは明らかにニュー・ヨーク市場目当てになされたものであったろう。<sup>(24)</sup> セネカ郡をも含め、農村的な諸郡の人口は、1855年から75年にかけて、とくに増大はしなかったものの、減少したわけではなかったし、定着率も増加していた。この事実は、ニュー・ヨーク州の農村が、西部との競争にさらされたとはいえ、それを乗り切る能力をも有していたことを示している。

のみならず、農業の変化は、単に西部との競争への対応というよりは、新たな都市市場の開拓という積極的意味を持っていたのではないだろうか。<sup>(25)</sup> 酪農業の発展を見ても、そうした印象を受ける。オレンジ郡のバターや、ハークマー郡のチーズは、19世紀前半から有名であったが、後半に入ると、いわゆるチーズ工場が農村に出現する。チーズは従来、個々の農家で作られていたので、品質もまちまちであったが、チーズ工場は、かかる状態を改善した。すなわち、チーズ造りの上手な農民がそれに専門化し、近隣の農民はミルクを提供し、自家製造はやめるという方法である。その結果、品質向上がもたらされ、都市において、より良い値段で売れることになる。また、西部諸郡の穀作にしても、東部の農民が移住してきて、以前と同様に小麦を作っているというだけではない。クローバーを輪作にとり入れ、肥料を使用し、さらにタイルを利用して排水をおこなうなど、地味の保全、改良にも努めているし、新式の農業機械の採用にも熱心であった。ケユーガ郡のオーバーンが、<sup>(26)</sup> 農業機械生産の中心地になったのも、周辺農村の需要にささえられたためといえよう。

こうした新しい農業は、一口でいってお金のかかる農業であった。チーズ工場の場合など、ミルク提供農家にとどまるかぎり、設備投資の必要はなかったが、乳牛頭数を増やしたり、良い品種の牛を買う必要が生じたかもしれない。土地の改良や機械購入ということになれば、もちろん一層費用がかかる。本稿の最初に引用した農民のように、家族労働力にも恵まれ、良い馬と良い農具を持っていても「お金はごくわずかしかなかった」場合には、同じ場所に留っていても「暮らし向

注(23) 忘れられがちな「たきぎ」の問題について次を見よ。Arthur H. Cole, "The Mystery of Fuel Wood Marketing in the United States," *Business History Review*, XLIV (1970), 339-359.

(24) P. S. Lott Collection (MSS), Department of Manuscripts and University Archives, Cornell University; Anne Gertrude Sneller, *A Vanished World* (Syracuse, 1964), p. 234.

(25) この点は、ダンホフが強調したところである。Clarence H. Danhof, *Change in Agriculture: The Northern United States, 1820-1870* (Cambridge, Mass., 1969).

(26) Gates, "Agricultural Change,"; チーズ工場については、次の資料がある。New York State Agricultural Society, *Transactions* (1863), pp. 170-200.

きが良くなる」見込みはなかった。かかる農民にとっては、西部の競争や土地の疲弊よりも、資本の不足こそ問題であった。

すでに農場を所有し、農業に従事している農民はともかく、これから独立し自分の農場を持つとしていた農村の若者にとって、資本の必要は一層深刻な問題であった。旧来の小麦中心の農業であれば、最初にかかる費用はそれほど大きなものではない。しかし、畜産、酪農経営ということになれば、農場規模も大きめでなければならず、家畜購入の必要もあった。ニュー・ヨーク東部諸郡にあっては、19世紀中葉にいたる以前に小麦中心の経営は不可能になっていたから、この地域の若者が西部諸郡を目指したということもあったであろう。一方、西部諸郡に生まれた若者の場合にも、機械導入にともなう農場規模拡大や、土地改良にともなう地価上昇が、最初の出発を困難なものとしていた。未開墾地が多く、地価も安いスチューベン郡への流入が目立ったのは、かかる事情によるものであろう。そして、農場主としての独立が不可能な故に、あるいは、そのための資金を得るために、都市へ向かった若者もいなかったわけではないであろう。

このように考えてくると、ニュー・ヨーク州農村からの人口流出の原因は、西部の競争や都市の誘惑といった外的要因によるものだけではなく、資本不足や独立の困難といった内的要因によるものが多かったことが解る。さらに、この州特有の社会的事情として、かの反地代闘争を生み出したような前近代的小作制が、農民の流出をもたらしたことも考えあわせると、外的要因よりは内的要因の方が重要であったように思われる。<sup>(27)</sup> 少し意地悪く考えるならば、西部の競争や都市の発達を悪者に仕立て、自らを被害者とみなすことによって、ニュー・ヨーク農民は、内部の問題から目をそらしていることができたともいえる。そうした意味では、概説書の記述は、東部農村の側から見ると、いささか一面的であるということもできよう。

なお、東側から眺めることによって、西漸運動の性格が、よりはっきりつかめたという点も記しておきたい。それは西漸運動と西部開拓とも同一視してはいけないということである。<sup>(28)</sup> ニュー・ヨーク州においても、人口の西方移動は見られたのであり、遠く西部のフロンティアにおける開拓進展は、大きなうねりの波頭にすぎなかった。また、ニュー・ヨーク州における事態は、西漸運動が、都市化や工業化とからまりつつ進んだこと、ただし東部農村が都市労働者の供給源になったとは簡単にはいえないことをも、明らかにしてくれたといえよう。

(経済学部教授)

注(27) 反地代闘争については次を見よ。David Maldwyn Ellis, *Landlords and Farmers in the Hudson-Mohawk Region, 1790-1850* (Ithaca, N. Y., 1946). なお、この書物は、ニュー・ヨーク州東部の農業について詳細な記述をしている。

(28) この点については、岡田泰男「人口の西方移動とその実態」(『総合研究・アメリカ』第1巻所収、研究社、1976年)においても述べたが、そこでは農村から都市への移住を本稿よりも強調して記してある。